

複都制と移動王権

山 田 邦 和

はじめに

首都とは、国家の中心であるとともにシンボルである都市である。多くの場合、首都は国家元首などの国の最高指導者の拠点であり、そこには行政機構が集積され、一国の政治的な中枢となっている。

近代国家においては、ほとんどの国では首都はひとつと定められている。ただ、首都と呼べる都市を複数有するという制度、つまり「複都制」を採っている国家もある。たとえば、南アフリカ共和国は三権分立の思想を貫徹するため、行政首都ツワネ（プレトリア）と立法首都ケープタウンと司法首都ブルームフォンテイン（マンガウング）を分置している。スワジランド王国では、政府機関の所在する行政首都はムババネである一方、国王の常住地としての王都であるとともに国会の所在地としての立法首都であるロバンバが併置されている。オランダ王国の場合、歴史的な国家のシンボル都市としてのアムステルダムが象徴的かつ法的な首都とされているのであるが、王宮や政府の所在地として実質上の首都の役割を果たしているのはデン・ハーグである。また、国家の最高指導者や政府機関が国内の複数の場所を移動したり、支配者の代替わりのたびに権力機構が移動するという事例もしばしばみられる。たとえば、王政時代のリビア（一九五一―一九六九）においては西のトリポリと東のベンガジが勢力を競い合っており、その調整のために国王と政府機関はこのふたつの首都の間を季節ごとに巡回していた。これは「移

動王権」による複都制と呼ばれるべきである。

このように、複都制や移動王権の制度は近代においてすら珍しいものではない。ましてや前近代にあつては、首都制度は多様なありかたを見せるであろう。本稿では、前近代の日本を中心として複都制や王権の移動について論じることによって、その時代における国家の権力構造にせまる手がかりを得たいと思う。

一 ヤマト政権の歴代遷宮

古墳時代から飛鳥時代にかけてのヤマト政権は、首都をひとつに限っていたわけではなかった。この時代の日本列島には後の平城京や平安京のような整備された都市は未だ出現しておらず、その点をとりあげてこれを「都市以前」の時代と見なす見解があるけれども、都市の概念をそうした狭いものとしてとらえる必要はなく、この時代の日本にも都市は存在し得たと考える^①。ただ、そうだとすると、古墳時代や飛鳥時代の日本の都市が後代に比べると未成熟の段階にあつたことは確かである。

『古事記』や『日本書紀』に記載された伝承によると、その時代の歴代の天皇（大王）は、代替わりごとにその居所を替えていた。これを「歴代遷宮」と呼んでいる。いま、初代の神武天皇から第三六代の皇極天皇までの各大王と、大王に準ずる存在としての神功皇后と飯豊青尊（飯豊天皇）をとりあげ、それぞれの宮とその候補地、さらには『延喜式』諸陵寮にみえる山陵の所在地を一覧してみよう（図・表）。皇極天皇を下限としたのは、その次代の孝徳天皇は難波長柄豊碕宮（考古学上の「前期難波宮」という壮大な宮を築いており、この時期が都城史の大きな画期となるからである。なお、ここに挙げた天皇の中には神話・伝説上の存在であつて非実在と推定される者も多いし、天皇陵の所在地についても問題が多いけれども、この表ではそれらも含めて記載しておく。

この図・表からは、ヤマト政権の大王の宮は、代替わりごとに近畿地方中央部の各地を点々としていることが見

てとれるであろう。原則として大王宮はヤマト政権の本来の本拠地である大和国に置かれているのであるが、大和国の中でも大王宮の所在地は一定の地域に偏るのではなく、磯城（城上郡・城下郡）、高市（高市郡）、葛城（葛上郡・葛下郡・忍海郡）といった広い範囲で移動を繰り返している。仲哀天皇の穴門豊浦宮（長門国）と檀日宮（筑前国）は戦時における行宮、継体天皇の樟葉宮（河内国）・筒城宮（山背国）・弟国宮（同）は同天皇の即位時の特殊事情によるものであるから除外するとしても、景行・成務両天皇の高穴穗宮（志賀高穴穗宮）、仁徳天皇の難波高津宮や反正天皇の丹比柴籬宮のように、大和国を離れて摂津国や河内国、さらには遠く近江国にまで大王宮が営まれたと伝えられているものもある。さらに、大王の宮とその山陵の所在地を比較してみると、同じ郡内または隣接郡内に存在するものは意外と少ないことに気づく。神話上の存在であって実在が否定される初代神武から第九代開化までの各天皇と、埋葬地が判然としない崇峻天皇^③を除くならば、そうした事例は崇神・景行・宣化・舒明・皇極各天皇と飯豊青皇女しか見られないのである。

このように、古墳時代から飛鳥時代にかけての大王宮が一定の地域に限られなかったり、大王の宮とその山陵がまったく別の地域に造営されている理由はさまざまに推測されるであろう。その中で最も大きな理由は、この時代の大王位の継承のありかたの流動性の高さにあるのだと思う。すなわち、この時代には後世のように長子相続が一般化していたわけではなく、大王位を継承する資格のある王族は常に複数が存在していた。前大王の死去にともなう誰がその後継者の地位を射止めるかは、しばしば峻烈な政治闘争を引き起こした。そして、大王位の継承権を持つためには、有力な王族たちは常日頃から地縁と血縁を駆使した独自の勢力を築き上げていたはずなのである。こうした独立性の強い王族たちの間で大王位が継承されていくならば、大王の交替のたびに王宮の位置が変動することはむしろ当然といわねばならないのである。

表 ヤマト政権の宮の一覧表

天皇 代数	天皇名	宮	宮の推定地・ 伝承地	『延喜式』によ る山陵所在地
1	神武天皇	橿原宮	大和国高市郡	
2	綏靖天皇	葛城高丘宮	大和国葛上郡	大和国高市郡
3	安寧天皇	片塩浮孔宮	大和国葛下郡	大和国高市郡
4	懿德天皇	輕曲峽宮	大和国高市郡	
5	孝昭天皇	掖上池心宮	大和国葛上郡	
6	孝安天皇	室秋津島宮	大和国葛上郡	
7	孝靈天皇	黒田廬戸宮	大和国城下郡	大和国葛下郡
8	孝元天皇	輕境原宮	大和国高市郡	
9	開化天皇	春日率川宮	大和国添上郡	
10	崇神天皇	磯城瑞籬宮	大和国城上郡	
11	垂仁天皇	纏向珠城宮	大和国城上郡	大和国添下郡
12	景行天皇	纏向之日代宮 高穴穗宮	大和国城上郡 近江国滋賀郡	大和国城上郡
13	成務天皇	志賀高穴穗宮	近江国滋賀郡	大和国添下郡
14	仲哀天皇	穴門豊浦宮〈行宮〉 橿日宮〈同〉	長門国豊浦郡 筑前国糟屋郡	河内国志紀郡
一	神功皇后	磐余若桜宮	大和国城上郡	大和国添下郡
15	応神天皇	明宮（輕島之明宮）	大和国高市郡	河内国志紀郡
16	仁德天皇	難波高津宮	摂津国東成郡	和泉国大鳥郡
17	履中天皇	磐余稚桜宮	大和国城上郡	和泉国大鳥郡
18	反正天皇	丹比柴籬宮	河内国丹比郡	和泉国大鳥郡
19	允恭天皇	遠飛鳥宮	大和国高市郡	河内国志紀郡
20	安康天皇	石上穴穗宮	大和国山辺郡	大和国添下郡
21	雄略天皇	泊瀬朝倉宮	大和国城上郡	河内国丹比郡
22	清寧天皇	磐余穗栗宮	大和国城上郡	河内国古市郡
一	飯豊青尊	忍海角刺宮	大和国忍海郡	大和国葛下郡
23	額宗天皇	近飛鳥八鈎宮	河内国安宿郡	大和国葛下郡
24	仁賢天皇	石上広高宮	大和国山辺郡	河内国丹比郡
25	武烈天皇	泊瀬列城宮	大和国城上郡	大和国葛下郡
26	継体天皇	樟葉宮 筒城宮 弟国宮 磐余玉穗宮	河内国茨田郡 山背国綴喜郡 山背国乙訓郡 大和国城上郡	摂津国嶋上郡
27	安閑天皇	勾金橋宮	大和国高市郡	河内国古市郡
28	宣化天皇	檜隈廬入野宮	大和国高市郡	
29	欽明天皇	磯城嶋金刺宮	大和国式上郡	大和国高市郡
30	敏達天皇	百濟大井宮 訳語田幸玉宮	大和国城上郡 または広瀬郡 大和国城上郡	河内国石川郡
31	用明天皇	磐余池辺双槻宮	大和国城上郡	河内国石川郡
32	崇峻天皇	倉梯柴垣宮	大和国十市郡	
33	推古天皇	豊浦宮 小墾田宮	大和国高市郡 大和国高市郡	河内国石川郡
34	舒明天皇	飛鳥岡本宮 田中宮 厩坂宮 百濟宮	大和国高市郡 大和国高市郡 大和国高市郡 大和国城上郡	大和国城上郡
35	皇極天皇	飛鳥板蓋宮	大和国高市郡	

二 世界史における複都制と移動王権

古代における複都制の典型的な事例として、ローマ帝国を挙げることができる。二九三年、ディオクレティアヌス帝はローマ帝国の版図があまりに広大になったことを理由として、ふたりの正帝とふたりの副帝が帝国を分割統治するテトラルキア（四分割統治、四分治制）を導入した。そこでは、東方正帝であり首座の皇帝としてのディオクレティアヌス自身の都であるニコメディア（現、トルコのイズミット）、西方正帝の都としてのメデオラヌム（現、イタリアのミラノ）、東方副帝の都としてのシルミウム（現、セルビアのスレムスカ・ミトロヴィツァ）、西方副帝の都としてのアウグスタ・トレウェロム（現、ドイツのトリアー）、さらに伝統的な元老院の所在地であるローマ、の五つの都市に首都機能が分割されることとなった。すなわち、ローマ帝国においては国家の指導権を分けることによって、それに対応する複数の首都が必要となったのである。日本においても類似した例として挙げられるのは、一二世紀末から一四世紀前半にかけて、京都のほかにも幕府の所在する鎌倉が存在し、その両都市が実質的な国家の中枢機能を分担していたということである。これもまた、事実上の複都制とみなすことも可能だろう。

複都制のもうひとつの類型として、中国の唐の制度を挙げることができる。唐は、長安と洛陽（東都）のふたつの首都を置いていたのである。これは、防衛力に優れた長安を正都（第一首都）とするともに、経済の中心としての洛陽を副都（第二首都）とし、皇帝と宮廷は長安を定住地としながらも、必要に応じて洛陽へ移動したのである。唐の複都制には、開元十一年（七二三）に建国の記念の地であった太原（北都）が加わり、さらに至徳二年（七五七）には鳳翔（西京）と成都（蜀郡）をも加え、五都に拡大している。そして、複都制の都として位置づけられていた時代には、それぞれの都には正都長安に準じた官衙施設と留守司が設置されていたのであった。

一三世紀から一四世紀にかけて中国を支配したモンゴル人の征服王朝である元（大元ウルス）は、大都（現、北

京」と上都（現、内モンゴル自治区）の二つの都市を首都としており、皇帝（大カーン）と宮廷はそのふたつの都市の間を季節ごとに巡回していた。^①これは、元が遊牧を常としていたモンゴル人によつて建てられた王朝であることに起因するのであろう。元の場合には、複数の首都の間を王権が移動するというやりかたをさらに徹底していたことになる。

西ヨーロッパにおける「移動王権」の事例としては、カロリング朝フランク王国が挙げられよう。この国の最盛期を造り上げたのは国王カール一世（カール大帝、シャルルマーニュ）（在位七六八～八一四）であり、彼の首都はアーヘンであった。ところが、カールは常にアーヘンに留まることはできず、インゲルハイム（現、ドイツのラインラント＝プファルツ州のインゲルハイム＝アム＝ライン）、ナイメーヘン（現、オランダのヘルダーラント州）、エルスタル（現、ベルギーのリエージュ州）などの都市を巡回し続けていたのである。この時代のフランク王国では、見かけ上の領域の広大さにもかかわらず王権はまだまだ不安定であり、国王は常に国土の各地を巡って地方支配者と接触する必要性があつたのである。同じヨーロッパ世界においても、中世ローマ帝国（東ローマ帝国）は強大な帝権を築き上げており、皇帝があえて首都から他都市に移動する必要を覚えなかつた。中世ローマ帝国の首都であるコンスタンティノポリスが当時のヨーロッパ世界最大の巨大都市であつたのに対し、フランク王国の首都アーヘンはそれに比肩するべくもない小都市であり、そこにはこのふたつの国家の発展段階の差が如実にあらわれていた。すなわち、フランク王国に見られたような移動王権とは、国家体制が未成熟の段階に採用された制度だったのである。

三 飛鳥・奈良時代の日本における複都制

日本においては、公式に複都制が宣言されたのは天武天皇十二年（六八三）に発布された同天皇の詔によるもの

であつた。そこでは「凡都城宮室、非^ニ一^ニ處^ニ、必造^ニ兩^ニ參^ニ。故先欲^レ都^ニ難波^ニ。是以、百寮者、各往之請^ニ家地^ニ。」とされ、飛鳥（飛鳥淨御原宮）の他に難波宮が都として指定されたのである。ただ、日本における複都制への試みは天武天皇以前にも模索されていたようである。孝徳天皇が難波長柄豊碕宮を正都としながら、その晩年には山碕宮（京都府乙訓郡大山崎町）を造営したり、天智天皇が近江大津宮を正都としつつ近江国蒲生郡置^{ひつき}野に都地を求めようとしたというのも、複都制への試行の一環として理解することができよう。天武天皇の場合、難波宮には孝徳朝に造られた壮大な朝堂院が残っていたから、難波は行政首都である飛鳥に対する儀礼の首都として構想されていたものであると考える。

複都制^⑤が全面的な展開をみるのは、八世紀中葉の聖武天皇の時代にいたつてのことである。聖武天皇は天平一二年（七四〇）一〇月から一七年（七四五）一〇月までの五年間はそれまでの都であつた平城宮を出て、恭仁宮、難波宮、甲賀宮（紫香樂宮）の三つの都を造営した。こうした聖武天皇の一連の行動によつて首都がどこであつたのかさえ不分明になつてしまい、この時代は「同天皇の彷徨^{ほうこう}五年」とさえ俗称されるような理解しがたいものと考えられてきた。しかし、私見によると聖武天皇の構想とは、難波宮、恭仁宮、甲賀宮の三つの都を置き、天皇が常にそれらを移動する複都制を採用するところにあつた。こうした体制は次の淳仁朝や称徳朝にも受け継がれる。すなわち、淳仁天皇は正都を平城宮に置きつつ、政界の最高実力者である藤原仲麻呂（惠美押勝）の拠点である近江国に副都保良宮を置いた。また、称徳天皇は平城宮を正都としつつ、法王という宗教界最高の地位を与えた僧・道教の出身地である河内国弓削郡に副都としての由義宮を建設し、それを仏教の聖地としようと試みた。日本古代における複都制は聖武朝・淳仁朝・称徳朝に最盛期を迎えたのであるが、これは元やフランク王国に見られたような移動王権としての色彩が濃いものであつた。

四 平安京における京内の王権移動

桓武天皇は延暦三年（七八四）に長岡宮遷都、さらにはそれに引き続いて同一三年（七九四）には平安宮遷都をおこなった。これによって日本古代の首都は平安宮・平安京に固定化されるにいたり、複都制は完全に停廃されたのである。

桓武朝から朱雀朝にかけては、歴代の天皇の居所は平安宮内裏であった。もちろん、この時期の天皇が平安宮内裏からまったく動かなかったわけではなく、遊宴、狩猟などのために神泉苑などの離宮、北野や大原野、大堰川といった野や川に行幸することはしばしばみられる。ただ、平安宮内裏が天皇の本来の居所とされたことに疑いはない。

これを明確にしたのが、大同元年（八〇六）の平城天皇の即位にあたって群臣が「聖忌將_レ周。国家恒例。就_レ吉之後。遷_二御新宮_一」として新しい宮に遷ることを奏上したのに対して、天皇は「此上都先帝所_レ建。水陸所_レ湊。道里惟均。故不_レ憚_二暫勞_一」としてそれを拒否した（『日本後紀』大同元年七月十三日条）というできごとであった。さらに、弘仁元年（八一〇）には平城上皇と弟の嵯峨天皇が対立し、そのあげくに天皇側が上皇側を軍事的に制圧するという事件がおきる。「平城太上天皇の変（薬子の変）」である。この時の大きな課題となっていたのは、上皇が平安宮を廃して平城宮への遷都を求めていたのに対して、嵯峨天皇がそれを敢然と拒否したことであった。そして、平城上皇の失脚とともに平城宮遷都構想も崩れ去り、首都は平安宮に固定化することになる。平安宮が桓武天皇が定めた「万代宮」（『日本後紀』弘仁元年九月一〇日条）であると主張されるようになるのも、この事件の結果であった。

一方、弘仁一四年（八二三）に嵯峨天皇は淳和天皇に譲位して太上天皇となり、内裏から退出して平安宮の外側

にあつた冷然院を御所とした。さらに嵯峨上皇は承和元年（八三四）に平安京の西郊の嵯峨の地に嵯峨院を造営し、そこを主たる後院（太上天皇宮）とすることとなる。奈良時代には、太上天皇は天皇の宮の内部に太上天皇宮を造営して居所とするのが通例であつた。恭仁宮跡でも聖武天皇の内裏の隣接地にそれと同等規模の宮が確認されており、これが元正上皇の太上天皇宮であつたと推定されている。平安宮の場合も、内裏の西方に「縁の松原（宴の松原）」とよばれる広大な空閑地が広がっており、平安宮の設計段階ではこれが太上天皇宮の建設予定地とみなされていたという蓋然性の高い説がある。⁽⁷⁾ 嵯峨上皇が平安宮の外に後院を造営したことはこうした先例を廃止するものであつた。これ以降、淳和上皇の紫野院（後の雲林院）、宇多上皇の宇多院など、平安宮の外側に続々と後院が造営されることになる。

村上天皇の天徳四年（九六〇）九月二三日、平安宮内裏は失火によつて焼失する。村上天皇は平安宮職曹司に避難した後、冷泉院（冷然院を改名）を臨時の内裏とした。これが里内裏の始まりとなる。続く冷泉・円融・花山の三天皇は基本的には平安宮内裏を居所としていたが、円融天皇は貞元元年（九七六）の内裏焼亡の際には太政大臣藤原兼通の堀河院を接収してこれを里内裏としたのであつた。一条天皇以降の各天皇の時代になると、平安宮内裏が天皇の本来の居所であるという原則は揺らいではいないものの、歴代の天皇はお氣に入りの里内裏を使用することが次第に多くなつていく。⁽⁸⁾ たとえば一条天皇や後一条天皇の一条院、三条天皇の枇杷殿、後朱雀天皇や後冷泉天皇の京極院、二条殿、東三条殿、高陽院といった里内裏がそれである。

平安時代中期には、首都としての平安京自体は不変であつた。しかし、王権はその都市の内部で移動し続けていたし、太上天皇ともなると京の外側に後院を設けることもあつたのである。ただ、王権が移動するといつてもその範囲は平安京とその周辺から出ることはなかつたから、フランク王国のような国家体制の不安定さをここに見ることはできないだろう。むしろ、首都としての平安京が成熟し、都市のどの部分であつても王権を支えることができ

るまでになっていった現れであると評価したいと思う。

まとめ

首都という制度は、その国家や時代によってさまざまな姿を見せる。その典型が、本稿で検討した複都制や移動王権であった。今、それを整理しておおざっぱにその類型を列举するならば、次のようになるであろう。

・複数の都を巡回する移動王権… 聖武朝の難波宮・恭仁宮・甲賀宮、淳仁朝の平城宮・保良宮、称徳朝の平城宮・由義宮、唐の長安と洛陽、大元ウルスの大都と上都、カロリング朝フランク王国のアーヘン他

・複数の都で首都機能を分担… 天武朝の難波宮・飛鳥浄御原宮

・王権自体を分割して複数の首都を置く… ローマ帝国のテトラルキア、鎌倉時代の京都と鎌倉、江戸時代の京都と江戸

・都市内での移動王権… 平安時代中期以降の平安京

最後に、次の検討課題とするため、論じ残した問題についてメモしておこう。まず、移動王権と官僚機構（統治機構）の関係がある。つまり、移動王権の場合、統治機構も王権に追隨して移動するのだろうかということである。これには、統治機構自体が未成熟で王権の移動にもなつて巡回できるような簡素なものであった場合や、逆に王権が移動しても統治機構は首都に定住しており、王権が遠隔操作することが可能だった、という場合などが考えられるであろう。また、王権と都市との関係も検討課題とすべきである。カロリング朝フランク王国においては都市がまだ成熟していなかったことが、王権が移動せざるをえなかった理由の一端として考えられる。一方、都市が一応の成熟をみているのにもかかわらず、なおも移動王権を採用した事例としては、聖武朝の日本や中国の元をあげることができる。一方、確固たる首都を築き上げた段階では、王権は都市と不可分の関係を結ぶことになる。平安

時代の日本がまさにその状態であり、王権は平安京と不可離の「都市王権」へと発達を遂げたのである。

前近代において、国家の首都は必ずしもひとつに限られていなかった。複都制や移動王権の問題を検討することは、その国家の本質を解明するとともに、他の地域の国家との比較に指針を与える手段を提供してくれるであろう。

〔付記〕 本稿は、平成二六年（二〇一四）一〇月四日におこなわれた鷹陵史学会第二三回年次研究大会（於・佛教大学紫野キャンパス）の公開シンポジウム「動く王権と都市空間―前近代東アジアの権力と都市―」における「前近代日本における複都制と王権の移動」と題した報告の内容に基づき、新たに書きおろしたものである。シンポジウムで一緒にさせていただいた佐古愛己、渡邊信一郎、貝英幸の各氏の報告と発言からは多大な学恩を受けることができた。記して謝意を表したい。なお、古代日本における複都制の問題については平成二八年（二〇一六）刊行予定の別稿（山田邦和「日本古代都城における複都制の系譜」）で論じているため、本稿ではそのエッセンスを述べるにとどめている。詳細についてはそちらを参照していただきたい。

註

- （１） 山田邦和「中世京都市史研究の課題」（山田『京都都市史の研究』所収、東京、吉川弘文館、二〇〇九年）。
- （２） 個々の天皇陵の真偽については、山田邦和編『陵墓一覽表』（高木博志・山田邦和編『歴史のなかの天皇陵』所収、京都、思文閣出版、二〇一〇年、参照）。
- （３） 崇峻天皇は蘇我馬子によって弑逆されるという異常事態の中、殞もなされずにその日のうちに埋葬されている（『日本書紀』崇峻天皇五年十一月三日条）。『延喜式』
- （４） 渡辺健哉氏より教示を受けた。
- （５） 角田文衛「アーヘンで思ったこと」（角田『京の夕映え』所収、東京、東京堂出版、一九九三年）。

諸陵寮も崇峻天皇陵を「無陵地陵戸」としていて、あくまで陵名帳における名目だけの存在であって、実際には存在しなかったことを示唆している。崇峻天皇の真陵として奈良県桜井市赤坂天王山古墳を宛てる説もあるけれども、上述のような経緯から考えるならばそれには疑問がある。

- (6) 複都制については、「付記」に示した近刊の拙稿のほかに、瀧川政次郎『京制並に都城制の研究』（『法制史論叢 第二冊』、東京、角川書店、一九六七年）も参照。
- (7) 橋本義則「平安京の中心―中院と縁の松原をめぐる憶説―」（臈谷寿・山中章編『平安京とその時代』所収、京都 思文閣出版、二〇〇九年）。
- (8) 平安時代における天皇の居所の移動については、詫間直樹編『皇居行幸年表』（東京、続群書類従刊行会、一九九八年）、参照。